

2010年度 東京蜘蛛談話会 12月例会

1. 日時 2010年12月5日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒150-0011 東京都渋谷区東 2-5-3
「JR 渋谷駅」東口(東急文化会館側)より, 「学 03 日赤医療センター行」バスにて約5分, 「國學院大學前」下車, 徒歩1分, 170円
3. 連絡 当日は, 東京環境工科専門学校の電話が使用できないので, 緊急時には以下に連絡ください. 加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター, OHP 等用意いたします.
5. 講演をご希望の方は, 演題と使用希望機材
(スライド, OHP, コンピュータ)
を事務局初芝までお知らせください.
〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社エコシス 初芝伸吾
mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel: 042-501-2651 Fax: 042-501-2652

- 渋谷駅東口から徒歩15分です. 坂道がありますので, バスを利用した方がよろしいかと思います.
- 東京環境工科専門学校及びその周辺には駐車場ありません.



東京環境工科専門学校

東京蜘蛛談話会 2010 年度採集観察会

1. 期 日： 第 3 回 10 月 10 日（日） 第 4 回 2 月 13 日（日）
2. 場 所： 東京理科大学 理想会記念自然公園
3. 集 合： 東武野田線「運河」駅改札前 午前 10:00
4. 世話人： 八幡明彦

※ 駅前にコンビニがありますが、あまりあてにできません。

※ 「理想会記念自然公園（通称理窓公園）は、江戸川と利根川を結ぶ利根運河の江戸川から 4km 付近の左岸、昔の大字『北海道』（地元の人はキタケイドと呼んでいました）に東京理科大学同窓会『理窓会』が、大学創立 100 周年を記念して 1980 年 6 月に開園した面積 13 万㎡の自然豊かな公園です。

公園ができる前のこのあたりは、通称東深井谷津と呼ばれる長谷津に小さな谷津がいくつも入り込む複雑な谷津地形をなし、台地にはアカマツを主体にコナラやクヌギなどが茂り、谷津では稲作が行われていました。東葛の里山の原風景を残したこの公園は今でも山あり谷ありで、斜面林、雑木林、ヨシ原、池、湧水、水路、開けた草地、日陰の草地、明るい湿地、暗い湿地、乾燥地など、これほど多様な環境が配置され豊かな生態系をなす地域は珍しいものです。春の梅林と桜、ハス池、ひょうたん池の睡蓮、秋の紅葉は特に見所です。

クモが出てくる子どもの本情報 (4)

2007-10 年に出版された絵本 2 点・雑誌 2 点の紹介

萩野 康則

今回は 2007 年から 2010 年に出版された絵本 2 点と雑誌 2 点を紹介させて頂く。

イザベル・トーマス（著）・今西 大（訳）「動物ガチンコ対決 必殺毒針戦士サソリ 対 超巨大グモタランチュラ」

AB 変判/32pp. 鈴木出版 2007 年 4 月発行 ISBN978-4-7902-3185-1 本体 1,800 円

「動物ガチンコ対決」シリーズ全 5 巻の 1 冊で、本書以外はライオン対トラ、サメ対シャチ、ゾウ対サイ、そしてホッキョクグマ対グリズリーベアというラインナップである。原シリーズには "Alligator vs. Crocodile" という巻もあるのだが、なぜかこちらは翻訳出版されていない。大型哺乳類が幅を利かす中、蛛形類は健闘しているなあ、と何となくうれしくなる。

日本語版出版社のウェブサイトを見ると「1 対 1 のガチンコ対決. 斬新なおもしろさ!」と書かれており、いかにもこれら好敵手を実際に闘わせたらどうなるか、という内容を想像させるが、実はそうではない. おのおの動物の特性を 5 ラウンド 10 項目（各ラウンド判定項目は 2 項目）で比較して、それに点数をつけて勝敗を競う、という極めておとなしい闘いである。

本書サソリ対タランチュラの「ラウンド名」と（判定項目）は次の通りである：

第 1 ラウンド 「からだの大きさと力」
（大きさ、力の強さ）

第 2 ラウンド 「スピードとスタミナ」
（スピード、スタミナ）

第 3 ラウンド 「おそろべき感覚」（カムフラージュ、感覚）

第 4 ラウンド 「必殺の武器」（毒、武器）

第 5 ラウンド 「身をまもるワザ」（おどかさず力、防御力）

さて勝ったのは、どちらか？ 壮絶な格闘を期待して読むと拍子抜けしてしまうが、載っている写真は綺麗で、迫力がある。書かれている内容も、概ね正確なようだ。紫外線ライトをあてるとサソリが光って見える、ということ、私は本書で初めて知った。

最後の方には、これら蛛形類の最大の天敵は人間であることも書かれていて、保護的な観点も忘れていない。ただし、「おやつにサソリを食べる国もある」として、アジア系の少女が笑顔でサソリの串刺しを持っている写真には、苦笑してしまったが。

また、5 ページの分布図はいただけない。サソリの分布の北限が北緯 50 度のキレイな直線になっていて、日本全土にサソリが分布することになっている。

なお、「動物ガチンコ対決」の原題は“Animals Head to Head”である。「必殺毒針戦士サソリ 対 超巨大グモタランチュラ」も原題は“Scorpion vs. Tarantula”とシンプルで、おどろおどろしい枕詞は、日本の出版社が付けたものである。扇動的なタイトルで、人目を引き、売り上げを伸ばそう、という目論見なのだろうが、果たしてそれが成功しているのかどうか。

よく売れている本は閲覧のニーズも高いので、たいいてい図書館にも揃っているものである。そこで千葉県内の主要公立図書館の図書資料を横断的に検索できるサイトで本シリーズを検索したところ、5 巻全てを揃えているのは、36 館中わずか 4 館であった。千葉県の例だけからの推測だが、派手なタイトルがアニメやゲームを連想させて、一般購入者にも図書館にも、購入を躊躇させていると思えてならない。



こしだ ミカ（作）「くものもち」 こどものとも年少版 2008 年 9 月号

21×20cm/24pp. 福音館書店 雑誌コード 03731 税込 380 円



福音館書店は異なる対象年齢向けに 8 種類の月刊児童雑誌を発行しているが、この「こどものとも年少版」は 2～4 歳向けである。

ある日、家の中に巨大なクモが現れた。主人公の少女は怖くてたまらないのだが、お母さんが「くもはええむしやから、ころしたらあかん」と言うので殺すこともできない。洗面所に出る、風呂場にも入ってくる、暗い部屋を点灯するとそこにいる…。

あまりによく出会うので「もち」と名付けた（何故「もち」なのかは不明）。すると不思議、いままで怖いだけの存在だったク

モが、怖いには怖いけれど、しばらく会わないと「どうしたんだろう」と気になるようになった。

作者が自宅で、アシダカグモに出会った経験をもとに書かれた作品。絵は骨太のタッチで迫力があり、飯野和好さんの絵に通じるものがある。つまり、決してほのぼのとはしない絵なのだが、ほのぼのとしたストーリーと不思議とマッチしているのだ。

こしだミカさんは、川の絵画大賞展入選（1999 年）、ブラティスラヴァ世界絵本原画展入選（2009 年）などの受賞歴をもつ、気鋭の絵本・造形作家である。ご本人のウェブサイトによれば「生きもののもつ、しぶとさやあっけなさ、おかしみ、哀しみをカタチにしたい」人間や動物のオブジェをさかんに制作されていて、その作品は NHK 教育 TV の小学校 1 年生向けの生活科・特別活動の番組「できたできたできた」でも使われている。絵本には「アリのさんぽ」（架空社、2005 年）や「太陽とかわず」（小川未明作、架空社、2006 年）、「ほな また」（農山漁村文化協会、2008 年）などがある。その絵は各種の画材と手法を駆使して描かれていて、美しさや正確さを追求する、というよりは、様々な表現の可能性を追求し、楽しんでいるように思われる。これは立体造形も手がけられる方だからこそであろう。一般のイラストレーターの絵とは一味違う。

2 年前の雑誌バックナンバーなので、在庫があるかどうか、出版社に確認したところ、2010 年 8 月 27 日現在、まだ残部があるとのことであった。

さくま ゆみこ（訳）・斎藤 隆夫（画）「くものつな」 こどものとも 2008 年 11 月号

B5 判/32pp. 福音館書店 雑誌コード 03779 税込 410 円

「こどものとも年少版」が 2～4 歳向けであるのに対して、こちらの「こどものとも」

は5〜6歳向けである。

本作はシェラ・レオネの昔話。アフリカにはアナンシをはじめとする、クモが登場する民話がたくさん伝えられている。多くの場合、クモはずる賢いが失敗ばかりしている主人公になっているのだが、本作品ではその役はウサギが演じていて、クモは脇役となっている。

登場するのはウサギ、ヒョウ、ラクダ、ヤマアラシ、カメ、ゾウ、そしてクモ。飢饉で食べ物がなく、みんなガリガリのフラフラになっている。しかしクモだけは、元気でピンピンしている。いぶかしく思ったウサギが尋ねると、クモは夜になってから樹上の母グモの巣に、母グモが降ろしたつなを使って、ウサギを連れていく。そこには食べ物が豊富にあり、ウサギは腹一杯食べて地上に戻った。次の日、元気になったウサギを見て、今度は残りのものたちが不思議がる。問い詰められたウサギはクモとの約束を破り、秘密を話してしまう。そしてその夜、クモが眠っているすきに声色を使って母グモにつなを降ろさせ、昇っていこうとするが…。ヒョウになぜ模様があるか、ゾウの鼻はなぜ長いかなど、楽しいオチが待っている。

さくまゆみさんは出版社の雑誌編集者を経て、翻訳家になられた方で、アフリカ文学研究家でもある。日本絵本賞翻訳絵本賞受賞の「ゆき」（ユリ・シュルヴィッツ作、あすなろ書房、1998年）や産経児童出版文化賞推薦の「AはアフリカのAーアルファベットでたどるアフリカのくらし」（イフェオマ・オニェフル作、偕成社、2001年）、そして我々クモ屋には馴染みの深い「シャーロットのおくりもの」（E.B.ホホワイト著、ガース・ウィリアムズ絵、あすなろ書房、2001年）など、主として児童文学の分野で、膨大な数の作品を翻訳している。

斎藤隆夫さんは絵本作家。絵本作品に「カガカガ」（1997年）、「かえるの平家ものがたり」（いずれも日野十成文、2002年）、「おおぐいひょうたん」（吉沢葉子再話、2005年）、第42回小学館絵画賞受賞の「まほうつかいのでし」（上田真而子文、1995年、以上福音館書店）などがある。また、さし絵作品に「うみがわらっている」（内田麟太郎文、銀の鈴社、2000年）などがある。

原色系なのに上に灰色を被せたようなくすんだ独特の色づかいや、動きのある構図、力のある目、輪郭線に直線を多用したデフォルメされた登場人物が特徴で、独自の斎藤隆夫ワールドを形成している。本書でも、ウサギやヒョウたちが、眠っているクモを起こさな



のように、抜き足、差し足、で歩いている場面があるが、実によく感じがでている。

日本のもの・海外のものを問わず、民話にもとづく作品と相性が良いようで、特にアメリカ、アフリカ、パプアニューギニアの先住民の民話によって描いた絵に、斎藤さんの個性が一番出ているように思われる。

こちら出版に在庫確認したところ、2010年8月27日現在まだ残っているそうである。

佐藤 信治（著）「写真絵本 ぼくの庭にきた虫たち 6 クモ観察記」

AB判/32pp. 農山漁村文化協会 2010年2月発行 ISBN978-4-540-09276-3 本体
1,800 円



佐藤信治さんは、会社に勤め機械設計の仕事に携わるかたわら、自宅の庭で虫や野鳥、草花などの観察を 40 年あまりにわたって継続された、市井の観察者である。その成果は「庭の蟬」（1972 年、映画教育協会文部大臣賞）や「庭にきた虫ーいのちのドラマを親子でみるー」（1997 年）、「庭にきた鳥ーいのちのドラマを家族でみるー」（1999 年、いずれも農山漁村文化協会）として、制作・出版されている。

このうち「庭にきた虫」は、30 年以上にわたって庭で観察してきた虫たちの記録で、テントウムシ、アゲハチョウ、セミ、カタツムリ、カマキリ、ジョロウグモ、クサカゲロウ、ウスバカゲロウを取り上げて

いる。最初は娘や息子たちと一緒に虫を見ていたのが、後年はそこに孫も加わる。

会社勤めのため、観察できるのは休日と夜間に限られる。従って、見たいと思っていた脱皮や羽化の様子をなかなか見ることができない。しかし、何年も掛けて観察を続け、生活史を見とどける。また、子や孫たちの発する素朴な疑問に対して、書物等の知見から答えれば簡単なのだが、この著者はそれをしない。たとえいくら時間が掛かろうとも、彼らと一緒に観察をして、自分たちの目で確かめて回答を得るのだ。あくまで自分の目で見る、というこの姿勢こそが、自然科学の本来あるべきかたちであろう。

また、著者は写真撮影が得意だったようで、テントウムシやアゲハの幼虫の孵化、飛んでいるセミ、生きたカタツムリの歯舌など、相当のテクニックが要求されるであろう素晴らしい写真が、ふんだんに掲載されている。

各動物群の専門家から見れば「？」と思われる記述や、不適切な用語の使い方など、改

めるべき箇所がいくつかあるようである。しかしそのような疵があるものの、親・子・孫で、身近な虫を長期間観察した記録として大変貴重であり、これから子どもたちと自然観察をしようと考えている親にとっとは、とても示唆に富んだ参考例となっている。

佐藤信治さんは 1999 年に亡くなっているが、死後 10 年を経て、この「庭にきた虫」に登場する虫たちが、各グループごとに 8 冊の写真絵本にまとめられた。そのうちの 1 冊が本書「クモ観察記」である。

基本的なストーリーは「庭にきた虫」のジョロウグモの章そのままであるが、子どもが読みやすいように文章は簡単にしている。また、写真もオリジナルのものをそのまま全て使用している（2,3 葉新たに追加されている）。本の判型が倍以上になったので、個々の写真のサイズも大きくなり、細部までより鮮明に見られるのがうれしい。

二点、気になることがあったので指摘しておきたい。まず、庭にいるその他のクモの代表として、コガネグモをあげているが、載っている写真はナガコガネグモである。著者はナガコガネグモをずっとコガネグモだと思っていて、何の疑問も持たれなかったに違いない。生物に相当詳しい方でも、このような勘違いはあるものだが、原稿をクモの専門家に見せていたら防げたミスである。

もう一つは、造網の途中で、横糸を張る際に、糸いぼからでた糸を第 4 脚で引っ張って縦糸に絡めるところを見て「クモは縦糸だけでなく横糸にもくっつかない」と断定している点である。クモがなぜ自分の網にくっつかないかについては、ファーブルの「足先油説」や「縦糸のみ歩行説」がよく語られるが、新海明さんも「本当のところは解明されていない」と「クモの巣と網の不思議」（池田・新海・谷川、文葉社、2003 年）に書かれている。そのようなクモ研究者長年の疑問に対して、こんなにあっさり結論を出されてしまうと、ちょっと待って！と言いたくなる。糸いぼから出たばかりの粘着物質は（まだ凝集して粘球になっていないので、あるいは酸素や水蒸気に触れることで粘着力が強くなるが、そのためには少し時間が掛かるため）粘着力が弱くてくっつかない、などという可能性だってあるのではないか。

ジョウロウグモの生活を解説した写真絵本としては、これまでに「ジョロウグモ」（主婦と生活社、1977 年）、「クモの一生」（いずれも千国安之輔、偕成社、1983 年）、「ジョロウグモ」（難波由城雄、偕成社、1986 年）が出版されている。いずれも力作揃いで、特に「クモの一生」は、内容の豊富さ、徹底した観察、写真の鮮明さ、文章の分かりやすさのいずれをとっても第一級の著作である。しかし残念ながらいずれも品切れで、現在入手は大変困難である。このような状況下、身近なクモの代表であるジョロウグモについて知りたいと思った子どもたちにとって、本書の出版は誠に時宜を得たものであろう。

前掲の 3 冊と較べると、本書はややつっこみに欠ける印象は否めないが、あまり盛りだくさんになっていない分、小学生を中心とする読者層にはかえって理解しやすいかも知れない。

秋山亜由子さんの「くものすおやぶん ほとけのさばき」単行本化される

萩野 康則

本紙 117 号で、本会会員である漫画家・絵本作家の秋山亜由子さんの絵本「くものすおやぶん とりものちょう」を紹介したが、待望の続編が出版されたので紹介させて頂く。なお、近年の秋山さんは、大人向けコマ割り漫画を描くときには秋山亜由子、子ども向け絵本を描くときには秋山あゆ子と、筆名を使い分けている。

秋山 あゆ子（作）こどものとも傑作集「くものすおやぶん ほとけのさばき」

B5変判/32pp. 福音館書店 2010年4月発行 ISBN978-4-8340-2546-0 本体800円



やはり本紙 119 号で予告した、こどものとも 2007 年 3 月号「くものすおやぶん ほとけのさばき」が単行本化されたものである。

ある夏の日、オニグモのあみぞう親分とハエトリグモの子分びょんきちが寺町通りを見回っていたところ、つくつく寺の和尚に呼び入れられる。何者かが仏像を盗みに入ったらしい。そこでびょんきちに仏像の恰好をさせ、それをわざと賊に盗らせて後をつけていく…。早くページをめく

りたくなる、痛快時代劇である。

絵はいつも通りのディテールにこだわったもので、仏像のモチーフや、町や寺内の様子に、たくさんのこだわりや洒落がちりばめられている。個人的には、（尾籠な話で恐縮だが）便器をのぞき込むダンゴムシ？が、無性に可笑しかった。

本文も例によって七五調で、実にテンポが良い。さっと読み飛ばしてしまえば何でもない文章だが、最終稿にたどり着くまでにはたくさんの単語を吟味し、何度もリズムを確かめ、推敲に推敲を重ねているはずで、秋山さんの苦勞が偲ばれる。

雑誌版が出たときには、いつもの秋山さんの絵に較べると、絵の具の載せ方にややムラがあり、デッサンも幾分粗いと感じたのだが、単行本になってみるとほとんど気にならない。また、単行本化に際して、表表紙と裏表紙は描き直されて、よりしっかり、鮮明になっている。

「おやぶん」シリーズはネットでの評判を見ると、子どもたちに大変好評なようであるので、第 3 作が出ることを期待したい。

ついでながら、みつばちを主人公とした、新シリーズの絵本も出ているので、紹介しておく。ただし、基本的にみつばちの本なので、クモの登場は少ない。

秋山 あゆ子（作）「みつばちみつひめ てんやわんやおてつだいの巻」

B5 横判/32pp. ブロンズ新社 2008 年 5 月発行 ISBN978-4-89309-439-1 税込
1,365 円

秋山 あゆ子（作）「みつばちみつひめ どどんとなつまつりの巻」

B5 横判/32pp. ブロンズ新社 2010 年 7 月発行 ISBN978-4-89309-490-2 税込
1,365 円

「てんやわんや」では陶器屋のつぼにシロカネグモの絵が描かれている。「なつまつり」では少し多くて、輪投げ屋、あみだくじ屋、裏表紙のヨーヨー釣り屋がクモだし、お面屋にもハエトリグモのお面が置いてある(何せ細かいので、見落としがあるかも知れない)。興味のあるかたはどうぞ。

最後に、KUMON の子育て・読みきかせ応援サイトに秋山さんのインタビュー記事が載っているので、URL を記しておく。クモに関する熱い思いも語られている。

<http://mi-te.jp/contents/cafe/portal_archivecontents.php?c=1&b=1&e=834>

「こがねぐも」のレポート

はまぐちゆうだい (小 1)

ぼくがみた「こがねぐも」についてかきます。

みたばしょ：ちばけんのだし（おにいちゃんはやきゅうれんしゅうじょうのちかく）

みた日：7 がつ 24 にち ごご 2 じころ

大きさ：やく 25 ミリ（おとうさんがはかりました。）

せいべつ：めす

とくちょう：おなかのいろがはっきりしてました。

「す」はすこしこわれていました。

とてもたかいばしょにいました。

おとうさんがめずらしいといっていました。

父補足：モデル個体は、170cm 以上の高さ（田んぼの外周に張り巡らされている竹竿の間）に円網を張っており、隠れ帯は個体下側に約 5cm くらいの長さのものが形成されていました。

あしのいろや大きさがそれぞれちがっていました。

ちょっとさわったら、くると「す」のはんたいがわにまわりました。

かんそう：とても大きく、うごくのがはやかったです。

なつやすみのしゅくだいで、「もけい」をつくってみました。

(ざいりょう～しんぶんし・キッチンペーパー，アクリルえのぐ，ビーズ)



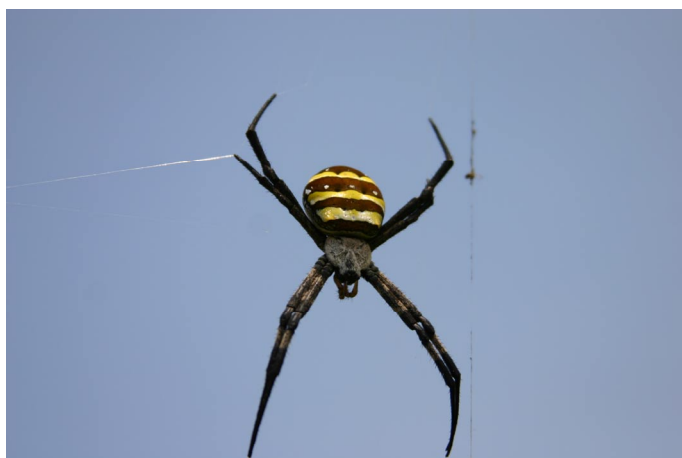
製作段階



完成：上



完成：前



レポートのモデル個体：千葉県野田市～父撮影

2010年6月13日(日)、日本山岳会の自然保護全国集会のあと、緑爽会主催の「スタディ・イン霞ヶ浦」にて中島はる作曲『蜘蛛の糸』公演に続いて、中島さんが講演されました。集会参加者 165 名。講演記録を日本山岳会の「緑爽会報」No.89 (2010 年 6 月 28 日発行) より転載させていただきます。転載に当り、加筆していただきました。(池田博明)

芥川龍之介『蜘蛛の糸』における蜘蛛学的考察

中島 はる

私はクモが好きというだけの理由で、特別に「日本蜘蛛学会」に入れてもらっている、名ばかりの会員です。勉強や研究などは苦手で、でも何か私にできることで少しでもクモのお役に立ちたいと考え、折にふれクモにちなんだ音楽を色々作ってきました。今しがた福井縁さんのすばらしい朗読とともに聴いて頂いた曲は、私が三年ほど前に書きました『ひとり歌芝居－蜘蛛の糸』という作品からの抜粋です。

いよいよ本題に入るわけですが、私は「公演」ならぬ「講演」というものを生まれて初めて体験することになって、かなりドキドキしております。どうなることかと心配ですが、どうかよろしくお願いいたします。

さて、「創作」というのはどんな種類のものでもそうでしょうが、まず「イメージ作り」から始まります。この作品でも、音符にする以前にさまざま思い描きました。極楽の朝の光と風、蓮の花の香り、蓮池の水のきらめき、そして蓮の葉の上に糸をかけている蜘蛛の姿...と。

ではここでお手元の写真をご覧ください。これは蜘蛛学会の谷川明男さんから送っていただいた「ヤサガタアシナガグモ」という蜘蛛とその網です。池などの水辺に水平の円網を張り昆虫を捕えて生きているクモです。

実はもう一枚写真を用意すべきだったかもしれません。この物語にはもう一匹、種類の異なるクモも登場しているからです。「ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹路ばたを追って行くのが見えました」という箇所はクモです。こちらは徘徊性のクモの仲間、網を張らずに歩き回りながら虫を探し捕えて生きているクモです。

クモの種類数は現在のところ日本に 1500、世界では四万あり、その半分が造網性のクモで、後の半分が徘徊性のクモと呼ばれます。網の形にも色々あります。さきほど「水平円網」と申しましたが、水辺に棲むクモの多くが水平や斜めに円網を張ります。よく「クモの巣」と呼ばれるオニグモなどのまるい網は「垂直円網」です。

ほかに、公園などで雨上がりによく目につくレースのハンカチーフは「棚網」、山のほうでよく見られるハンモック形やドーム形の「皿網」、枝と枝に渡された一本から数本だけの「条網」、「不規則網」「ボロ網」もれっきとした学問用語です。網の形はまだまだあるのですが、これくらいにして次はいよいよクモの「糸」の話に移りましょう。

「クモの糸に人はぶら下がることができるか」という実験をやって成功した人がいます。大崎茂芳さんという高分子化学の先生ですが、数年前、鹿児島の「クモ合戦」などで知られるコガネグモの糸を大量に巻きとって環を作り、普通のロープにつないでそれに体重 65 kgのご自身がぶら下がったのです。三十年来の夢だったそうです。研究によると、クモの糸は弾力性に優れ、「引っぱり張力」という引っぱりでも切れない性質ではナイロンやゴムや植物繊維より上だそうです。

糸は全てのクモが持ち、さまざまな場面で使われます。先ほどの徘徊性のクモだって、いつもお尻から糸を引いて歩いているのです。このとっさに飛び下りて逃げる時の糸、住居を作る時の糸、卵を包んで保護する時の糸、餌をぐるぐる巻いたりする時の糸、そして「バルーニング」といって子グモが空に向かって飛んでゆく時の糸。糸を使う場面は数多く、クモはその目的によって異なる種類の糸を紡ぎ出し、液体から固体に瞬時に変化させるというのですから驚きです。

ところで「クモは毒を持っているから怖い」と思っている人がいるようですが、最初のほうで申し上げました世界のクモ四万種の中、毒のあるのはその 0.1%、多く見積もっても 0.3%だそうです。残り 99.7%のクモには毒がないのです。よく映画などに出てくる大型のタランチュラも、実は人間に作用する毒は持っていません。見方によっては可愛いし寿命も長いことからペットとして飼う人もいます。

日本には毒グモはいなかったのですが、1995 年に大阪でセアカゴケグモという毒グモがたくさん発見され大騒ぎになりました。輸入貨物について上陸したものと推測されますが、関西を中心に分布を広げているようです。でも現在まで被害の報告もありませんし、側溝などに隠れ住んでいるものをわざわざ見つけ出していじめたりしなければ大丈夫ですから、むやみにこわがらないでください。

今日は自然保護の集会ということで、私も環境省のレッドリストというのを調べてみました（もらろん孫引きですが）。3155 種の野生生物の中に 16 種のクモ類が含まれています。

キムラグモ 腹部に体節の跡がある最も原始的なクモ。

ミズグモ 水草の間に糸を張りドーム状の住居を作る。

フジホラヒメグモ 富士山周辺の溶岩洞窟の中や周辺に生息。

イソコモリグモ 砂浜に生息し、波打た際からやや離れた砂地に縦穴の住居を作る。
などを含む 16 種が、絶滅危惧種に認定されています。

温暖化の影響はクモの分布にも表れて、図鑑に南方系と出ていたクモが東京でも発見されています。数日前、私も目黒の自宅玄関先で「マルゴミグモ」というクモを見つけました。それは二年前、蜘蛛学会の新海栄一さんが、国会議事堂前の植え込みで見つけたと驚きの発表をなさっていたクモです。

そろそろ終わりに近くなりましたので、クモのための宣伝をさせていただきたいと思います。

NHKの「ダーウィンが来た」というテレビ番組で、近々「ナゲナワグモ」という大変珍しい日本のムツトゲイセキグモの特集をやるそうです。それから来年二月の最後の日曜日に、四谷の紀尾井ホール（上智大学のすぐ近く）で「中島はるの世界」というコンサートをいたします。クモや昆虫や人間のための音楽会です。もし今日の話をちらっとでも思い出されて聴きにきてくださったら幸せに思います。

拙い講演に耳をお貸しくださり、ありがとうございました。

東京蜘蛛談話会 2010 年合宿旅行記

中西 亜耶

2010 年 7 月 17 日(土)

今年の談話会合宿は山形県小国（おぐに）町で開催された。私は訳あって、初日は夜から参加した。時間のせいか連休初日には空いている高速を車で飛ばしたが、クモ合わせの解散までにはすんでのところで間に合わなかった。今年の宿は国民宿舎「梅花皮（かいらぎ）荘」。部屋は中島亜紀さん、八幡秋山沙和ちゃんと同室。すでに二人は寝ていて、私も歯を磨いて寝た。

ところで最初から余談で恐縮だが、エレベーターホールには地酒「桜川」の自動販売機があり、（自販機の中身への興味もさることながら）機械上部に「清酒」「SAICE」と書いてあるのが非常に気になった。帰ってからインターネットの辞書で調べたが、SAICEという単語は見当たらない。これはやはり、いや、まさか「清酒」を英語っぽく書いただけなのだろうか……？ どなたかご存知の方がいれば、ぜひご教示いただきたい。

7 月 18 日(日)

食堂から見える飯豊（いいで）連峰の山並みの頂上付近には雪が残っている。涼しい地方にきたなあという感じがして嬉しい（実際は結構暑かったが）。部屋のある階のエレベーターホール（の、SAICE の向かい側）には、今回の合宿の世話人である池田さんが書いてくださった、予定表・クモ合わせの記録・注意事項等の張り紙がある。聞いた話では、前日は夕立でもものすごい土砂降りになったらしいが、張り紙によると、それでも夕方～夜間にかけて、宿の周辺で 50 種ほどのクモの採集・観察ができたらしい。

午前中は「温見平（ぬくみだいら）」にて観察会。林内にはカラカラグモの卵囊がやたらたくさんあり、メスも多い。低地では見られないウススジハエトリも谷川さんに教えていただいた。（他にどんなクモが見られたか、詳細は池田さんの合宿報告を待たれたい。）あまり聞かないセミが鳴いており、初芝さんによるとエゾハルゼミらしい。林道のすぐ下には沢が流れており、清流の音が耳に涼しい。（ちなみに私はずっと林道にいたので、その頃八幡さんが沢で転んで（？）いたことなど、この時は知る由もない。）何かよく跳ね



みんなしゃがむのだ



スリリングな吊り橋

るアカガエルがいて、苦戦して捕まえて写真を撮った。あとで筑波大の須黒君にタゴガエルと教わった。ギンリョウソウも見た。個人的な話で恐縮だが、私はこの4月に就職したので、このように色々な生き物を教えてもらえたり見たりできる時間はとても貴重だ。生物学科にいたので野山に出る機会は比較的多かったが、そのため余計にいまは外に出られないことを寂しく感じる。また合宿や観察会では、道にしゃがみ込む人をたくさん見られることも嬉しい。私が普段大学や町なかでしゃがみ込んでいると散々アヤシイだの何だのと言われるが、ここではみんなしゃがむのだ。どうだ！

お昼を飯豊山荘でいただき、午後は場所を移動するグループと、温見平に残るグループの2つに分かれた。私は場所を移り、玉川中里公民館のあたりで観察をした。皆が渡っていく吊橋はなかなかスリリングで、よく揺れるうえに手すりはスカスカ、足元もスケスケ、おまけに

下は水の澄んだ川で、ゴロゴロした石がすぐそこに見える。高所恐怖症の人はまず渡れないだろう。アシナガグモ類がいたので渡る際に一人で観察していたが、橋が風でどうしても揺れるのと、手元が狂ってバイアル瓶を落としそうなのと、お尻のあたりが軽くゾワゾワするのとでどうしても落ち着かなかった。帰りは帰りで、秋沙ちゃんがやたらに跳ねて、また揺れること揺れること。ちょっと不安になったが、まあ揺れる橋って楽しいよね。実は私もちょっと揺らしたかったのだが(!), 大人なので我慢した。同行者によっては、私もはしゃいだかもしれないが…。

この辺りではムツボシオニグモのメスや、オオヒメグモとアリ(アミメアリ??ぐらいの大きさ)との壮絶な戦いなどを観察した。後者について少し書く。アリはオオヒメグモの右の第1脚脛節に噛み付いていて、噛まれた脛節は曲がってしまい、まるでもう一節増えたかのように見える。オオヒメグモは怒って、糸をかけたり滅茶苦茶にアリを噛みまくっているのだが、アリはなかなか噛む力を弱めないようだ。やがてクモの毒液でバイアル瓶の底に水滴ができた頃、もうすっかり糸に巻かれ、身動きがとれなくなったアリがクモの脚から離されて、ようやく決着がついた。彼女はおそらく死んでしまった。

宿に帰って温泉に入り、夜間観察の前に夕食をいただく。おかずがたくさんあったので嬉々としてご飯を 3 回もお替りしていたら、あまりの大食ぶりに周りの人から呆れられていたようだ。若い男の子であるところの須黒君（おそらく食べ盛りの大学 3 年生）よりもたくさん食べたということで一部ではネタになっていたが、須黒君は須黒君で、池田さんが持ってきてくださったプラムを死ぬほど食べていた。そして須黒君と私は夜間観察の出発ギリギリまで食べていたため、集合に若干遅れてしまった。須黒君、なんだかごめん…。

夜間観察は、本日午前中の観察地である温見平で行った。コオニグモモドキ・キンヨウグモの幼体や、笹からぶらさがって寝るウススジハエトリのメスなどを観察した。帰り道、新潟の田中さん親子の車が道で突然止まったので何かと思い車を降りたら、なにやらクワガタが落ちていたようだ。同じく何かを期待して車を降りた八幡さんは「なんだ、ヘビかと思ったよ～」と残念そうだった。花形昆虫よりもクモやヘビで喜ぶ大人がここにいる。愉快的なことだ。（八幡さんは中でも特殊な方だとは思うが。）

夜間観察の後は恒例のクモ合わせ&親睦会。池田さんが実体顕微鏡や小野さんの図鑑、そしてエタノールをガロン瓶で（！）持ってきてくださっていた。谷川さんや初芝さんのご指導を受けて、クモの脚に生える聴毛が顕微鏡下で見分けられるようになった。聴毛はとても細くて、エタノールの中で微かにそよいでいた。持ち帰ろうと思っていたメキリグモのオスも、一瞬で同定して教えていただいた。谷川さんも初芝さんも、図鑑を見なくても生殖器でしか見分けられないような種がわかるのがすごい。もう形を覚えてしまっているのだ。おそらく談話会にはそんな人がたくさんいるだろう。自分は 1 種につきどれだけ見たら覚えられようかと考えると、それらの方々がこれまで標本同定にかけてきたであろう膨大な時間に目がくらむ。

この日も楽しい夜を過ごした。

7 月 19 日(月・祝)

この日は廃校の小玉川小中学校で観察会を行い、午前中で解散だ。朝食をたらふく頂き、片付けをして出発する。一部の方々は学校に到着した後、近くの「マタギの郷交流館」に行ったようだ。私もマタギには若干興味があったが、クモとマタギを天秤にかけ、クモをとってしまった。

しかし暑い。日陰でオオヒメグモやユウレイグモ類をつらつらと観察していたら、琢磨君がトリノフンダマシを持ってきて見せてくれた。近くでは甲野さんと谷川さんが、校舎の中に入ってしまったイワツバメの救出作戦を遂行している。校庭の縁のすぐ外は崖になっており、フラフラと縁に沿って歩いていると、下からガサガサと音がする。音の主は案の定、八幡さんだ。そのまま歩いていき校庭の端から道路に出ても、人や車はほとんど通らず、草刈機の音が辺りに響いている。ふと見ると貞元さんが畑の中に入っていく。なんだか平和だ。暑さも相まって、静かな夢の中にいるようだ。

解散後、ほとんどの方が 11 時 40 分頃発のバスに乗るのを見送り、私は谷川さん、八幡さん、沙和ちゃんを乗せて小国駅へ向けて車を出した。これから数日間かけて周辺各地の神社に「和算額」の調査をしに行くという八幡さんと、駅周辺で別れる。最近では和算にハマっているらしいのだが、八幡さんの興味の対象は多様で、また普段接することのないものが多く、本当に面白い。同じような興味・趣味をもった人が全国にどれだけのいるのか知らないが、文化の多様性を守るため、こういった人たちは保全の対象にした方がよいのではないだろうか。後日談によると、この後の和算額の調査の成果は上々だったそうで、何よりである。

この後は谷川さんと沙和ちゃんを東京まで送り届けたのだが、途中、荒川胎内 IC の先の海岸にイソコモリグモを見に寄らせていただいた。谷川さんと新海明さんが、数年前にイソコモリ調査をされた海岸だ。砂浜から掘り出していただいたイソコモリグモの実物は、初めて見たが、白くて大きくて目が黒くつぶらで、コロコロしているものすごく可愛かった。最近の言葉(?)でいうと「萌え」である。しかし海岸には点々と杭が立っており不穏だ。谷川さんによると、どうやら杭の立っている所までは工事予定、という意味らしい。海浜植生も良好に見えるのに、この環境がいつまでも続かないものかしら…。日本海に面した白い砂浜に、イソコモリグモの可愛さと、こみ上げてくる切なさをおぼえた。長くなったが、以上で今年の合宿旅行記を終える。いつもながら好き勝手に、また、あまり合宿と関係のないことも多く書いてしまい、恐縮である。

最後になりましたが、今回合宿のお世話役を務めてくださった池田さん、そしてお世話になった合宿参加の皆様、この場を借りて感謝申し上げます。どうもありがとうございます。また来年も、よろしくお願いいたします！

(なお、インターネット上のウェブアルバムに自分の撮った写真をアップしてあります。クモの写真はあまりありませんが…よろしければご覧ください。また、載せてはマズい写真があれば教えてください。)

http://picasaweb.google.co.jp/113674065413507845775/2010071719_OGUNI_TokyoSpiderStudyGroup

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 安田明雄 〒231-0861 横浜市中区元町 5-219

TEL：045-641-0763 E-mail：kobato@gol.com

通信原稿投稿先：谷川明男 247-0007 横浜市中区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail：dp7a-tknw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4 月総会まで、8 月末、12 月末です。

KISHIDAIA 原稿投稿先：池田博明 258-0018 足柄上郡大井町金手 1099

E-mail：fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp

キシダイアの原稿締め切りは、6 月末日と 12 月末日です。

ムツトゲ

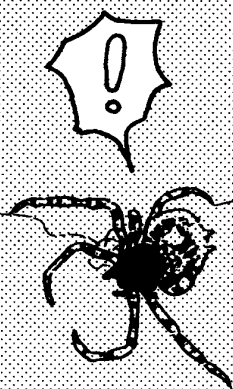
日記

～その6～



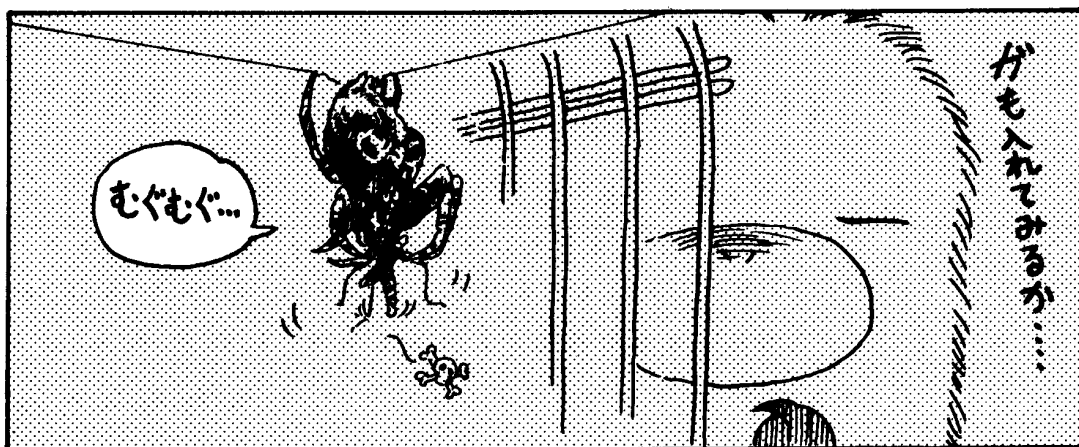
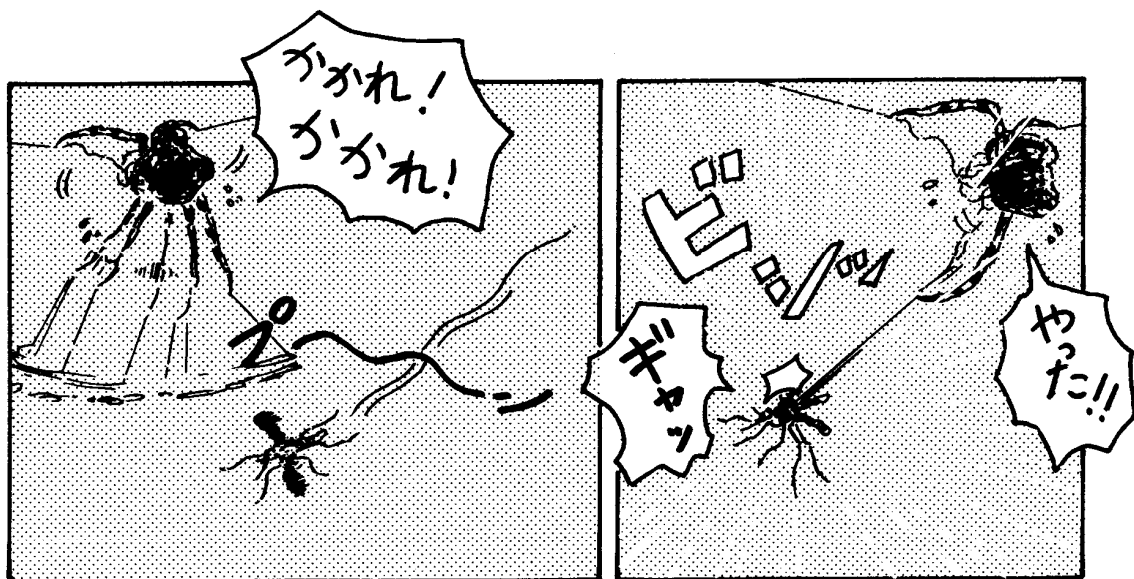
8月31日

0時45分

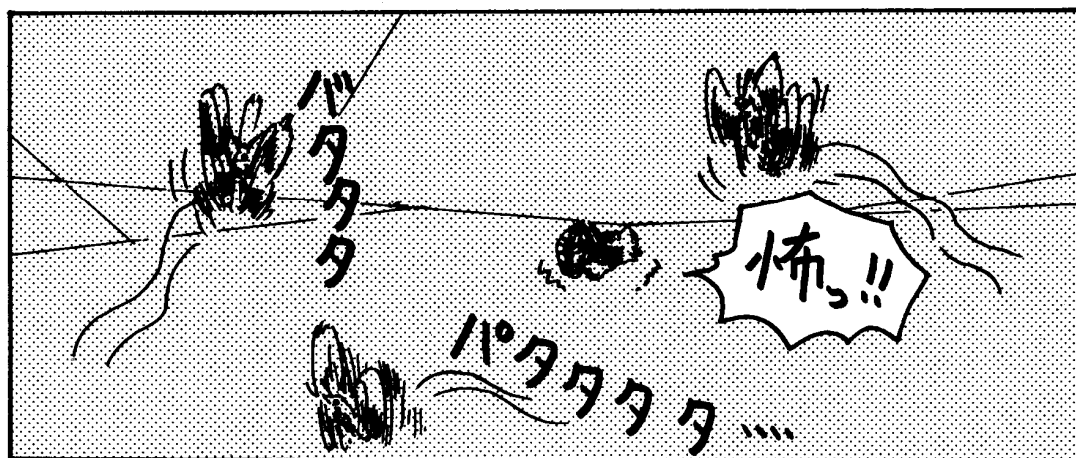


フ





9月5日



9月6日



